

株式会社リズナース (Re's nurse)

原芙美子

代表取締役



080-3008-5900

res.nurse.project@gmail.com

東京都北区赤羽2-48-5
エスパシオ201号

ビジョン

当社の理念は『看護師が笑顔で元気に働き続けられる環境を創る』です。情報共有と支え合い切磋琢磨できる、笑顔溢れるナースコミュニティの構築を目指します。

注目の在宅医療関連サービスへのインタビュー取材「PICK UP！在宅医療サービス」の第4回。潜在看護師の復職を支援し、現役看護師の離職防止にも取り組む「リズナース」。27年の臨床経験を持つ原代表が、ブランクや不安を抱える看護師には心理学を活用した研修と職場マッチングを、現場で働く看護師には定着支援を提供し、安心して長く働ける環境づくりを進めています。（2025年8月取材）

幼少期の憧れから看護師へ

看護師を目指したきっかけはなんですか？

小さいころの私にとって、祖父母が入院していた病院は特別な場所でした。お見舞いに行く度に「点滴や管には絶対に触ったらダメ」と何度も注意されていましたが、私はどうしても気になってしまうタイプの子供でもした。

病室で看護師さんが点滴の交換や滴下調整などを行っている姿を見て、「この人達は触れる事を許されている特別な存在なんだ」「女性がこんなふうには活躍できるなんて素敵だな」と、自然と憧れの気持ちを抱くようになったのが最初のきっかけです。

中学生になると、年の離れた妹に両親の関心が向いていることで、寂しさを感じるようになり、「自分は生きていて良いのだろうか」「自分が生まれた意味は何なのか」と自分の存在意義や価値に悩んだ時期がありました。

そんな中、「周りに必要とされる人間になりたい」という思いが芽生え、幼少期に抱いていた看護師への憧れを思い出し、看護学校の指定校推薦枠がある高校への進学を目指しました。

看護学校への進学するにあたって、どのような苦労がありましたか？

准看護師資格を取得できる5年制高校と迷ったのですが、中学の担任から「将来のことを早く決めすぎず、まずは普通科で幅広い視野を持ったほうが良い」とアドバイスを受け、普通科の高校を選びました。高校では指定校推薦をもらうために、学業以外にも生徒会長も引き受けるなど努力を重ねました。

晴れて看護学校に進学できたものの、実習の指導者から「レポートの出来が悪いから実習をさせられない」とそのまま帰らされたこともありました。悔しくて寝ずにレポートを書き直す日々も多く、苦労の連続だったことを記憶しています。さらに、実家が営んでいた設備業はバブル崩壊の影響で経営が厳しくなり、家計が逼迫したため、高校の授業料はすべて自分のアルバイト代でまかない、看護学校は奨学金を利用して通いました。経済的な不安と学業のプレッシャー、両方を抱えながらも、「絶対に看護師になる」という強い思いだけは揺らぎませんでした。



病院に就職されてからはどうでしたか？

1998年に埼玉協同病院へ就職し、循環器内科に配属されたのですが、1年目で第1子を授かり、産休・育休を9ヶ月取得してすぐに復帰しました。同期看護師が2年目看護師として現場で活躍する中、私は2歳違いで第2子を授かり、3年目を迎える頃には同期看護師とのキャリア差が大きく開いてしまいました。さらに、第2子妊娠中に離婚することになったので、子どもを連れて実家に帰り、救急外来や透析室で慌ただしく働きながら、生活・育児と必死に両立させました。

約11年ほど勤務した頃、偶然出会った中学生時代のバスケットボール部の顧問の先生から、「育児を優先するなら公立病院の方が負担が少ない」「空きがあるから面接を受けたらどうか」とアドバイスをいただきました。さいたま市立病院は災害拠点病院でDMAT（災害派遣医療チーム）の活動もしていたので、私は面接で「DMATの看護師として活動したい」と熱意を伝え、2009年に採用が決まりました。



転職後はどのような診療科目に勤めたのですか？

術後ICU病棟に配属された後、2次救急外来に異動し、そこで3次救急の立ち上げに携わることになりました。

当時、院内には3次救急指定病院の勤務経験がある看護師がおらず、患者の受け入れができない状況だったので、川口医療センターや日本赤十字病院へ研修に行き、3次救急で取り扱う医療器具やドクターカーの準備をゼロから整えました。

立ち上げ後、ドクターカーの初出動は、段ボール精製工場で機械に腕を巻き込まれた方の救助活動で、警察や消防と連携しながら、現場の安全確認や血圧測定、点滴のライン確保など

を進める一連の流れは、まるでテレビドラマのようで、心臓が高鳴るのを感じました。

救命救急センターでは副師長を任され、現場で働くことにやりがいを感じていましたが、多くの命と向き合い、一瞬の判断が生死を分ける緊迫した現場で、懸命に働く仲間たちが疲労やストレスに蝕まれていく姿を何度も目にしてきました。

不規則な勤務形態であるにも関わらず、夜勤の休憩時間も十分に確保できないまま、患者のために自分を削り続け、疲弊から現場を離れていく看護師に対して、やりきれなさも感じました。

「このままでは現場も人も持たない」という危機感は日を追うごとに大きくなり、この過酷な状況の中でどのように現場を守っていくべきか答えを探し続けたのです。

そして、看護師が安心して現場に戻り長く働き続けられる環境をつくるために、長年身を置いた現場を離れる決断にいたり、2025年3月に救命救急センターを退職しました。

疲弊した看護師が再び笑顔を取り戻し、誇りを持って働ける未来を築けるようにと、復職支援と定着支援を目的としたリズナースを起業しました。...



続きはQRコードからアクセスしご覧ください → → →

